

慣用句の理解に見られる母国語の影響

一 中国人日本語学習者の場合

薛 鳴 ・ 呉 月新*

1 はじめに

コミュニケーションを行うにあたって、その手段として言語によるものと非言語的なものがあるが、外国語学習と言うと、前者のことを指しているという通念がある。それはそれで当然である。が、学習が進むにつれて、その国の文化に気を配る必要が出てくるし、言語だけではなくその背景にある文化を理解し、その言語でコミュニケーションを行う際に、自然にその言語の人格に切り替えることが可能であればあるほど、外国語学習の究極の境地に到達しているとも言える。そこには言語はもちろん、非言語的要素もたくさん含まれる。たとえば、ジェスチャー、視線、距離、色彩など、われわれが無意識のうちにこなしている日常のすべてが文化であると言える。筆者はかつて中国人の握手と日本人のお辞儀について調べ、それを距離の取り方にも関連づけようと試みた。¹ また、日本語教育に携わっている中、多くのジェスチャーが慣用句に由来していることに気が付いた。本稿ではその慣用句に焦点を当ててみようと思う。

両手の人差し指を頭上の両端に立てて見せたり、指に唾を付けるしぐさをして眉に付けて見せたりすると、日本人なら前者は「怒る」を意味し、後者は「嘘だ」を意味すると理解している。一方、同じようなジェスチャーを中国人に見せると、前者に「お化け?」、後者に「不潔?」という反応が返ってくる。ジェスチャーだけの場合、日本語を知るかどうかは大して問題にはならない。次は日本語を勉強している中国人学習者にそれらのジェスチャーの基になる慣用句を聞いてみる。すると、「角を出す」は「デビューする」、「眉に唾」はいくら考えても想像が付かないと返ってくる。

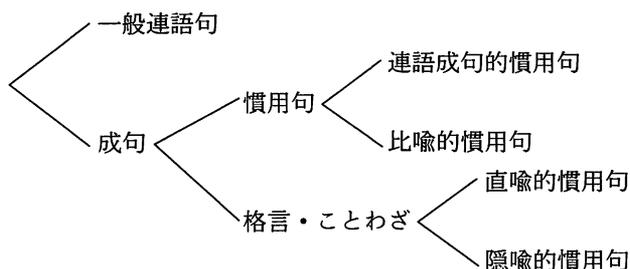
本研究は中国人学習者が日本語の慣用句をどのようにして理解に至るのかについて調べたものである。出発点はジェスチャーと関連のある慣用句であるが、調べるに際しては、それだけに留まらず、イメージが連想されやすいものを選んだ。

2 慣用句とは

慣用句とは何か。その定義を辞書で調べてみると、「二つ以上の語から構成され、句全体の意味が個々の語の元来の意味からは決まらないような慣用的表現」(『広辞苑』)や「二語以上の単語が結合して、それ全体である特定の意味を表すもの」(『大辞泉』)と少し表現が異なっているものの大同小異な解釈をしている。二つ以上の語の結合が普通の結合体より固く連結していて、それを勝手に改造することができないことを言っていると思われる。たとえば、「腹(はら)」、「食う」は男性が使う言葉で、女性は「お腹」、「食べる」を使うと習うと、じゃ、「腹が立つ」、「道草を食う」を女性が使うとき、「お腹が立つ」、「道草を食べる」がいいかと、日本語学習者なら、このような過剰反応が出かねないが、それはできない。それが慣用句である。

慣用句についての研究では宮地(1982)の『慣用句の意味と用法』をはじめに、日本語教育の観点からの研究や外国語との対照研究、語彙論的、統語論的、意味論的と、様々な観点から研究が行われてきた²。ここで特筆すべきは、上記の宮地の研究の中で「慣用句例解」には各慣用句の英語、中国語、韓国語と諸外国語の訳も付けられている。また、日本語教育や外国語との対照研究においても慣用句が取り上げられていることから、それらの研究によって、日本語の慣用句の特徴が一層浮き彫りにされたと言える。

宮地(1982)では慣用句を次のように位置づけて分類している。



慣用句は句全体が一つのまとまった概念として捉えられているが、その概念に到達する過程に個々の語から得られる「イメージ」に伴った具象化が自ずと行われるはずである。日本人の場合、幼児期から身につけているものも少なくないが、一方、外国人日本語学習者の場合、その構成要素なる個々の語から作り出されるイメージから意味を推測するため、母国語の影響が出やすい。それだけに、慣用句の習得はとりわけ難しい。

これから、中国人日本語学習者のケースを見てみることにする。

3 中国人学習者の場合

一言、日本語学習者と言っても、すでに日本に来ている学習者(本稿では留学生を対象とする)と、外国の教育機関で日本語教育を受けている学習者の二つのグループが存在する。

日本語教育の上では、前者にとっての日本語をJSL (Japanese as a Second Language) と呼び、後者にとっての日本語をJFL (Japanese as a Foreign Language) と呼んでいる。本稿ではより詳しく学習者の慣用句に対する理解を調べるために被験者を日本の大学に在学中の留学生と中国の大学で日本語を勉強している学生に分けてそれぞれ調査することにした。慣用句の理解にどのように母国語の中国語の影響が見られるかを考察し、それぞれのグループに差異が見られるかについても見てみたいと思う。

3. 1 JSL学習者の場合

まず、次のような慣用句を用意し、日本の大学に在学中の中国人留学生³にそれらの慣用句の意味について尋ねてみた。そこで次のような結果が出た。それを表1にまとめる。なお表中の数字は人数を示すもので、数字の横の括弧内の数字は「完全ではないがそれに近い」回答者数を表す (【表2】も同)。

【表1】 JSL学習者の場合

慣用句	回 答			慣用句	回 答		
	正 解	不正解	無回答		正 解	不正解	無回答
腹が黒い	14	2	4	角を出す	1	9	10
耳がはやい	12 (2)	3	3	ぬかに釘	1	7	12
顔が広い	11	6	3	あごで使う	1	2	17
鼻が高い	10 (2)	4	4	油を売る	0	8	12
腹が立つ	10	5	5	肩身が狭い	0	7	13
二階から目薬	10	0	10	肩を持つ	0	7	13
足を洗う	6	4	10	羽を伸ばす	0	6	14
猫に小判	5	2	13	小耳に挟む	0	6	14
馬が合う	5	4	11	自分のことは棚に上げる	0	5	15
胸襟を開く	3 (1)	10	6	道草を食う	0	3	17
水泡に帰する	3	3	14	寝耳に水	0	3	17
鬼籍に入る	1	10	9	さじを投げる	0	1	19
頭にくる	1	11	8	立て板に水	0	1	19

3. 2 JFL学習者の場合

同じ調査を中国の大学で日本語を勉強している学生に行ってみた⁴。その結果を表2に示す。

【表2】 JFL学習者の場合

慣用句	回 答			慣用句	回 答		
	正 解	不正解	無回答		正 解	不正解	無回答
腹が黒い	17	0	2	耳がはやい	3	7	9
鼻が高い	15 (2)	0	2	馬が合う	3	3	13
顔が広い	11	3	5	頭にくる	3	5	11
寝耳に水	11	2	6	胸襟を開く	2	1	16
足を洗う	10	1	8	さじを投げる	1	7	11
腹が立つ	9	5	5	油を売る	0	5	14
あごで使う	9	4	6	羽を伸ばす	0	8	11
水泡に帰する	8	2	9	自分のことは棚に上げる	0	16	3
肩を持つ	6	6	7	立て板に水	0	10	9
猫に小判	4	2	13	肩身が狭い	0	7	12
鬼籍に入る	3	5	11	道草を食う	0	8	11
角を出す	3	5	11	二階から目薬	0	6	13
小耳に挟む	3	6	10	ぬかに釘	0	2	17

3.3 理解に見られる難易の差

慣用句によっては理解に差があることが【表1】と【表2】で分かる。次は正解者数の順でグループ分けしたものである⁵。

JSL学習者

Aグループ

- ①腹が黒い
- ②耳がはやい
- ③顔が広い
- ④鼻が高い
- ⑤腹が立つ
- ⑥二階から目薬
- ⑦足を洗う

Bグループ

- ①猫に小判
- ②馬が合う
- ③胸襟を開く
- ④水泡に帰する
- ⑤鬼籍に入る
- ⑥頭にくる
- ⑦角を出す
- ⑧ぬかに釘
- ⑨あごで使う

Cグループ

- ①油を売る
- ②肩身が狭い
- ③肩を持つ
- ④羽を伸ばす
- ⑤小耳に挟む
- ⑥自分のことは棚にあげる
- ⑦道草を食う
- ⑧寝耳に水
- ⑨さじを投げる
- ⑩立て板に水

JFL学習者

- ①腹が黒い
- ②鼻が高い
- ③顔が広い
- ④寝耳に水
- ⑤腹が立つ
- ⑥足を洗う
- ⑦あごで使う

- ①水泡に帰する
- ②肩を持つ
- ③猫に小判
- ④鬼籍に入る
- ⑤角を出す
- ⑥小耳に挟む
- ⑦耳がはやい
- ⑧馬が合う
- ⑨頭にくる
- ⑩胸襟を開く
- ⑪さじを投げる

- ①油を売る
- ②羽を伸ばす
- ③自分のことは棚に上げる
- ④立て板に水
- ⑤肩身が狭い
- ⑥道草を食う
- ⑦二階から目薬
- ⑧ぬかに釘

JSLとJFLとで少し差が見られるが共通点が多い。まず、Aグループに入っている慣用句は身体語彙が含まれているものが多いことに注目したい。一方Cグループの慣用句は身近な言葉からなっているにもかかわらず、意味の推定に大変困難であることを示している。何がその理解に影響しているのだろうか。

4 慣用句理解に影響する要素

何が慣用句の理解に影響しているのだろうか。幾つかの側面から次のように考察していく。

4.1 典型的な慣用句かどうか

慣用句には典型的なものとそうでないものがある。慣用句は二つ以上の語の結合体であるが、その結合の度合いが高ければ高いほど慣用句らしさを増していくとされる。その結合の度合いを客観的に測る方法を提示する研究が発表されている⁶。統語的操作によって測る方法であるが、石田（2004）では次のように具体的な方法が提示されている。

- (1) 名詞句へ転換する
- (2) 受身表現にする
- (3) 命令表現にする
- (4) 意志表現にする
- (5) 連体修飾語を付加する
- (6) 敬語表現にする
- (7) 連用修飾語を挿入する
- (8) 肯定・否定表現にする
- (9) 連用修飾語を付加する
- (10) 慣用句を修飾成分にする

例えば、慣用句としての「足を洗う」を例にしてみると、(1)「△洗った足」、(2)「△足を洗われる」、(3)「○足を洗え」、(4)「○足を洗おうとする」、(5)「×汚れた足を洗う」、(6)「×足をお洗いになる」、(7)「△足を思い切って洗う」、(8)「△足を洗わないでいる」、(9)「○思い切って足を洗う」、(10)「△足を洗った翌年」のようになろうか。一定の条件（文脈）の中なら、使えそうなものに「△」を付けたが、「×」がついた(5)、(6)は慣用句ではなく、一般表現になってしまう。一方、「頭に来る」を見てみると、(1)「×来た頭」、(2)「×頭に來られる」、(3)「×頭に來い」、(4)「×頭に來ようとしている」、(5)「×大きな頭に來る」、(6)「×頭にいらっしゃる」、(7)「×頭にどっと來る」、(8)「×頭に來ない」、(9)「○本当に頭に來る（來た）」、(10)「×頭に來た人」のように、(9)以外はほとんど統語的操作ができない。両者には前者の「足を洗う」は他動詞句で、人の意志でコントロールできるものであるため、「命令表現」、「意志表現」にできるが、後者の「頭に来る」は自動詞句で、人の意志ではコントロールできないという性質から、「命令表現」、「意志表現」にできないのが当然である。この二つの慣用句に、結合の度合いの差が見られる。前者は結合の度合いが低いが、

後者は高い。従って、後者は前者より慣用句らしい性質を備えているということになる。

この二つの慣用句から見れば、確かに「足を洗う」は「頭に来る」より正解率が【表1】と【表2】では上位である。理解度上位のもので、「腹が黒い」も「鼻が高い」も「腹黒」や「鼻高々」と、もとの慣用句から複合語が作られたことからそのような慣用句はそれほど統語的制約が厳しくない。しかし果たして、一般の連語表現に近い、典型的でない慣用句の方が習者に理解されやすいと、一言で片づけられるだろうか。他に理解に影響する要因があるのだろうか。

4.2 中国語の慣用句

以上の要因の他に、学習者の母国語に同じ言語形式があるかどうかを見る必要がある。それも慣用句の理解に影響する要因だと考えられる。

中国語では慣用句にあたるものに「成語」という表現形式がある。「成語」には①古典(故事物語)から来たもの(例えば、“塞翁失馬”、“杞人憂天”など)もあれば、②近代になってから作られ、一般的に使われている固定連語形式(例えば、“一清二楚”－はっきりしている－、“一目了然”－一目瞭然－、“本末倒置”－本末転倒－など)もある。いずれのものも四字熟語がほとんどであるが、③対句形式(例えば“三天打魚，两天晒网”－三日坊主－など)や④四字以外の連語形式(例えば、“开倒车”－後退させる－、“开夜车”－徹夜する－など)もある⁷。宮地(1982)の分類からも分かるように、慣用句と成句は枠組みが大変近い上、はっきりとした境界線がないものもある。中国語ではいま見てきたように成語はかなり幅広いものであるが、第3節で見てきた学習者の理解度のテストに使われた慣用句は上述した中国語成語の②や④にあたるものがほとんどである。

そこで、上記の慣用句の中国語訳と学習者の理解に見られる代表的な誤解例を表3にまとめ、見てみることにしよう。

4.3 具象化過程の錯誤

【表3】から、次のようなことが言える。

- i 上記の慣用句と対応する中国語訳に成語(慣用句)に欠けているものがある。
- ii 誤解例は構成素の単語から受けたと思われるイメージからの連想(具象化)によるものが多い。
- iii 意味の推定に一部同じ単語が入っている中国語の成語を当てる傾向が見られる。

まず、iに関して、日本語の慣用句を中国語に訳す場合必ずしも対応する成語が存在するとは限らない。日本語と中国語の場合、漢文の影響があるにせよ、ここで扱っている慣用句は、そうした故事物語からきたものがない上、日本語と中国語という異なった言語同士である以上、違うのが当然であるが、欠けている場合、一般連語や説明調の訳になる。iiに関しては、イメージから連想する際に母国文化の影響を受けやすいことが以上の調査で分かる。母国語からの影響を論じる場合、常に「正」の影響と「負」の影響という二つの方向の影響があると考えられている⁸。本稿の場合、正の方向として上記Aグループの慣用句で、JSL、JFLの両グループとも正解率が高い「腹が黒い」や「鼻が高い」、「顔が広い」がそうである。

【表3】 慣用句対照表及び誤用例

日 本 語	中 国 語 訳	代表的な誤解例 (括弧内はその訳)
腹が黒い	黑心肠	性格内向 (性格が内向的だ)
耳が早い	消息灵通	窃窃私语 (こそこそ話す) ; 偷听 (盗み聞き)
顔が広い	神通广大	见识广 (見地が広い) ; 厚颜无耻 (厚かましい)
鼻が高い	趾高气扬	大鼻子 (西洋人)
腹が立つ	生气	胸有成竹 (自信満々) ; 胸怀大志 (大志を持つ)
二階から目薬	远水不解近渴	高瞻远瞩 (先見の目を持つ)
馬が合う	合得来	拍马屁 (馬の尻を叩く - 胡麻播り) ; 人是衣服马是鞍 (馬子にも衣裳)
猫に小判	对牛弹琴	小费 (チップ) ; 哀求 (哀願する)
足を洗う	洗手不干 / 改邪归正	洗脚 (文字通り「足を洗う」)
胸襟を開く	畅所欲言	心胸开阔 (心が広い)
水泡に帰する	归于泡影	落叶归根 (老後に故郷に帰ること) ; 长水泡 (水泡ができる)
鬼籍に入る	告别人世 / 死去	鬼迷心窍 ; 深入歧途 (邪道に入る) ; 见鬼 (ありもしないこと)
頭に来る	发怒 / 大发雷霆	绞尽脑汁 (知恵を絞る) ; 回头是岸 (悔悟する)
角を出す	生气	展露 (頭角を現す) ; 独出一帜 (目立ちたがり) ; 出风头 (目立ちたがり)
ぬかに釘	白费工	碰钉子 (釘にぶつかる - 断られる) ; 眼中釘 (目の中の釘 - 犬猿の仲)
あごで使う	随意摆布(人)	说大话 (大事を言う)
油を売る	偷懒	华而不实 (狡猾である) ; 大款 (お金持ち)
肩身が狭い	没有脸面	心胸狭窄 (気が小さい) ; 小气 (けちくさい)
肩を持つ	偏袒(一方)	肩负重任 (責任ある身) ; 平起平坐 (対等である)
羽を伸ばす	放松	展翅高飞 (遠くへ羽ばたく - 出世する)
小耳に挟む	听到(消息)	窃窃私语 (こそこそ話す) ; 耳根软 (耳元が柔らかい - 一人の言いなりになる)
自分のことは棚にあげる	自己的过错放到一旁	自食其力 (自分のことは自分でやる) ; 自私 (エゴイズム)
道草を食う	边走边玩	兔子不吃窝边草 (兔も小屋の周りの草は食わない - 悪人も自分の隣人には害を及ぼさない) ; 饥不择食 (空き腹にまずいものなし)
寝耳に水	大吃一惊 / 青天霹靂	听不进去 (耳を貸さない) ; 枕边细语 (枕元でささやく)
さじを投げる	病入膏肓 / 不可救药	投石问路 (石を投げて動静を探る)
立て板に水	口若悬河	摇摆不定 (ぐらぐらしている) ; 破釜沉舟 (背水の陣をしく)

構成要素の単語から、比較的容易に理解できるのは中国語にも似たような表現があるか、具象化の過程において中国人にも共通した認知方式を持っている結果だと言える。しかし、【表3】でも分かるように、「負」の影響の方が大きい。上記のiiiであげたように、その構成要素になっている一部の単語を母国語に既存する成句に当てて意味を推定する傾向が見られる。そこで次は主にその「負」の影響から考えてみようと思う。

【表3】に挙がっている代表的な誤解例は次の要因によると考えられる。

a. 構成要素の一部の単語に頼って推定されたと思われるもの

顔が広い：见识广、厚颜无耻⁹
 馬が合う：拍马屁、人是衣服马是鞍
 胸襟を開く：心胸开阔
 水泡に帰する：落叶归根、长水泡
 鬼籍には入る：鬼迷心窍；见鬼
 頭にくる：回头是岸
 ぬかに釘：碰钉子；眼中钉
 肩身が狭い 心胸狭窄
 道草を食う：兔子不吃窝边草
 さじを投げる：投石问路

b. 構成要素の単語から受けたイメージによるもの

耳が早い／小耳を挟む：窃窃私语；偷听—「耳」→「耳語」（こそこそ話す）¹⁰
 腹が立つ：胸有成竹；胸怀大志—「立つ」→膨らむ→「竹が入る」；「大志が入る」→成語
 二階から目薬：「二階」→高い所→成語
 猫に小判：「小判」→チップ
 角を出す：→頭角を現す；→目立ちたがり
 あごで使う：「あご」→話す
 油を売る：「油」→狡い；→お金持ち
 羽を伸ばす：→羽ばたく
 自分のことは棚に上げる：→自分で荷物を棚に上げる→成語
 寝耳に水：「寝耳」→枕／話す→成語
 立て板に水：「水に板を立てる」（と捉えたと思われる）→ぐらぐらしている→成語

慣用句は修辭的メタファーを持っているだけに、その対象物についての評価がついてまわると考える。ここで取り扱っている慣用句にはプラスの評価やマイナスの評価もあれば、どちらにもとれない中立なものもある。しかし、どちらかと言えばやはりマイナス評価が多いように思われる。そうした中、中国人学習者がプラス評価として捉える傾向を示しているものに、「羽をのばす」と「胸襟を開く」がある。他に、「腹が立つ」を一旦「胸」と結びつけるとそれもプラス評価に転じてしまうことが上に示した誤解例で分かる。そこから中国人の言語についての認知様式の一端を窺うことができる。

4. 4 JSL学習者とJFL学習者に見られる理解度の差

二つのグループの学習者の差異について調べることは本稿の主旨ではないが、中国の大学で調べることもできたので、この二者の間で違いが見られるかどうか視野に入れて、それぞれのデータを示すことにした。

3. 3で挙げた難易度を示したA～Cのグループを見てみると、Aグループに、JSLとJFLで顕著な差が見られるのはJSLで正解率の高い「二階から目薬」が、JFLでは正解率のもっとも低いCグループに入っていることである。逆に、JFLでは正解率の高い「寝耳に水」はJSLではCグループに入っていることである。偶然なのかどうか不明だが、日本に来ていて、ある程度日本の生活に慣れている留学生が理解しやすい反面、日本で生活したことがない中国にいる大学生は理解しにくい慣用語があるとすれば、その傾向はどんなものなのか、興味深いところである。逆なケースも見られたが、それはなぜか、あるいは、単にたまたま習得しているものだったかも知れないが、学習者の背景も考慮に入れる必要があると思われる。彼らの母国語における素養や教養レベルも影響していると考えられる。中国の大学生は留学生よりも一生懸命中国語の成語を当てようとする傾向が見られたことは確かである。それはしかし往々にして、誤解を招くという逆効果に結びついてしまうこともある。それについては今後の研究が待たれる。

5 おわりに

以上、慣用語の理解に見られる両グループの中国人学習者に共通した、母国語からの負の影響について主に見てきた。

本研究はわれわれが日本語教育の現場で出会った問題がきっかけになっている。慣用語から来たジェスチャーを見ても分からない、または誤解してしまうのは、その基になっている慣用語を知らないためだと考え、それを糸口に、慣用語の習得にどのような障壁があるのか、それを明らかにするためには学習者の母国語がどのように影響しているのかを調べる必要があると考えるに至った。本稿はその実証的な研究に当たるものである。よって、本稿で取り上げた慣用語は単に身体語彙に留まらず、イメージしやすいものを選んだ。従って、必ずしもジェスチャーで表現できるものとは限らないことを断っておきたい。

本稿の調査や分析を通して、文化が言語表現を支え、言語がまた人の思考を支えていることを改めて実感できたと同時に、日本語教育において、レベルが上がれば上がるほど学習者の文化的背景を考慮に置いて行うことの大切さへの小さな提言になれば幸いである。

〈注釈〉

- 1 薛鳴（1998）「親しさの距離」『論叢』第28巻第1号 中京短期大学
- 2 筆者の目に触れたものだけ挙げておくー森山卓郎（1987）「ケース22 慣用句」寺村秀夫、鈴木泰、野田尚史、矢澤真人編『ケーススターディ日本文法』、国広哲弥（1985）「慣用句論」『日本語学』第4巻第1号、森田良行（1985）「動詞慣用句」『日本語学』第4巻第1号、林八龍（2002）『日韓両国語の慣用的表現の対照研究 身体語彙慣用句を中心として』明治書院、石田プリシラ（2004）動詞慣用句の意味的固定性を計る方法『国語学』第55巻4号 日本語学会
- 3 本学に在学中で、日本語初級クラスで勉強している中国人留学生20名を対象とした。
- 4 中国長春工業大学外国語学院日本語学科の学生19名を対象に行った。
- 5 正解者数50%以上はAグループ、それ以下はBグループ、正解者数0はCグループとする。
- 6 これに関しては石田の一連の研究があるが、一番最近の研究として石田（2004）を参照されたい。
- 7 馬国凡（1978）『成語』内蒙古人民出版社 p 6～8を参照。
- 8 第二言語習得理論では「正（負）の移転」という用語が使われている。
- 9 下線部は意味の推定の鍵と思われる漢字（単語）を示す。（漢字は中国語の略字になる。以下同）
- 10 矢印はイメージの具象化を表す。

〈参考文献〉

- 石田プリシラ（2004）「動詞慣用句の意味的固定性を計る方法」『国語学』第55巻4号 日本語学会 p 42～56
- 徐 徳（1999）『日語人体词汇慣用語词典』 商务印书馆
- 迫田久美子（2001）『第二言語習得研究』 アルク p 10、p 81～83
- 宮地 裕（1982）『慣用句の意味と用法』明治書院 p 238～242
- 馬国凡（1978）『成語』内蒙古人民出版社 p 6～8